

専門部会での検討状況

1. 開催経過

「飼料用米・加工用米・輸出用米等生産拡大対策検討専門部会」
「品種構成・品質向上対策検討専門部会」とも同日にそれぞれ3
回開催し、出された意見等については、今後の令和4年産米以降の
取り組みに反映させていく予定。

第1回専門部会	令和3年5月19日
第2回専門部会	令和3年7月28日
第3回専門部会	令和3年9月22日

2. 概要

(1) 飼料用米・加工用米・輸出用米等生産拡大対策検討専門部会

○令和4年産米においても一定の主食用米の生産削減が必要な環
境にあることから、令和3年産米の取り組みにおける諸課題を
ふまえて、令和4年産米以降の取り組み拡大に向けた検討を行
うとともに、全農本所米穀部、全農インターナショナル(株)との
意見交換等に取り組んだ。

○令和3年産米の取り組み経過をふまえた今後の対応検討におけ
る主な論点（第1回検討会より）

- 需要減少のなかで、中期的な制度別・用途別作付けの絵姿をど
う考えるか。
- 制度別・用途別に同じ手取りとなる仕組みが理想ではないか。
- 需要量・価格水準を事前に明示した取り組みが必要ではないか。
- 加工用米・輸出用米などはコスト削減次第では、より広範な需
要に対応できる可能性があるのではないか。
- 生産構造と農地保全の観点から、地域的な制度別・用途別の作
付けのあり方をどう考えるか。
- 飼料用米等の生産拡大、定着にあたっての課題は何か。
- 新たな販路開拓についてどう考えるべきか。

○これまでの検討内容については、農林水産省との意見交換にお
いて活用するとともに、食糧部会における需給見通し等をふま
えた、令和4年産米の取り組みの具体化に反映。

(2) 品種構成・品質向上対策検討専門部会

- 需要に応じた生産・販売、近年における気象変動による異常気象等をふまえた課題認識、対応を検討した。
- 品種構成においてはコシヒカリの作付比率が高く業務用需要対応の観点から課題があること、制度別・用途別に栽培技術体系を変える必要性、気象変動に対応し現在の技術体系の見直しの必要性等について意見交換を実施した。
- 今後、整理した論点にもとづき令和4年産米の品種別作付けに反映させるとともに技術体系については、福島県との協議をすすめていく。
- また、これまでJAグループを中心に取り組んできた穀物検定協会における食味試験への出品については、令和4年産以降県推進会議として対応することとし、具体的な出品銘柄の選定、展示ほの設置、栽培指導等のあり方について検討をすすめた。
- 第3回専門部会における論点整理は別添のとおり。

以上

<添付資料>

- 令和4年産米以降における制度別・用途別品種構成（論点整理）

令和4年産米以降における制度別・用途別品種構成（論点整理）

1. 水田農業をめぐる中長期的な情勢認識

- 人口減少、コロナ禍の継続により、当面需要減少は継続し、主食用米の作付削減は今後とも暫くは避けられない。
- 一方、福島県においては営農再開地域における水稻作付面積は今後とも拡大する可能性。
- 需要構造として、コロナ禍は家庭食より業務用需要への影響が大きいですが、中長期的には世帯数の増加等により中食・外食のみではなく、家庭内食での簡便性追求の観点からも加工品原料としての需要は今後とも堅実に推移すると想定。
- また、水稻による水田フル活用の観点からは、飼料用米を中心としつつも加工用米・輸出用米へのより一層の転換も必要。
- このため、単に主食用米の削減にとどまらず、主食用米・飼料用米・加工用米・輸出用米全般としてのコスト削減の取り組みが競争力強化の観点からは避けられない状況。
- また、近年における地球温暖化による気象変動をふまえ、安定的な品質・収量確保の観点から現行栽培技術の総点検が必要な状況にある。
- 更に、近年における大規模な需給調整の取り組みの必要性に対応しての品種転換が間に合わない事態も見られ、種子注文からの仕組みの見直し検討も課題。

2. 令和3・4年産米における状況

(1) 令和3年産米

- 種子の配布状況からは、「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の作付けが減少し「天のつぶ」「里山のつぶ」の作付けが増加している状況。
- しかしながら、「天のつぶ」「里山のつぶ」については、作付け後、備蓄米のみならず、飼料用米へ相当転換され、結果として「コシヒカリ」の主食用米における比率は上昇している可能性が高いと想定（令和2年産コシヒカリ比率52%程度）。
- なお、令和3年産米の概算金水準から単収差を考慮すると、「中通りコシヒカリ」と「天のつぶ」の10a収入は、ほぼ同水準と推定される。

(2) 令和4年産米

- 令和4年産米に向けた消毒種子の注文状況（米改良協会）からみると、「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の注文は前年を下回って

推移。「天のつぶ」「ふくひびき」については当初の採種計画より多く種子を確保することとしており、実効ベースとの比較ではまだ種子に余裕がある状況。

- 今後、令和4年産米の生産数量の目安(面積)設定等の過程で「コシヒカリ」「ひとめぼれ」は実態として更に減少する可能性。

3. 令和4年産米以降における制度別・用途別品種構成等

(1) 検討の視点

- 品種構成の議論は、需給環境、家庭用・業務用の需要動向、制度別・用途別需要動向、目標とすべき米価・手取水準から多面的に検討することが必要ではないか。
- 令和3年産米の生産者手取りは、生産費の物財費をなんとかカバーするギリギリの水準にある(令和元年産物財費 69,655 円/10a)。
- しかしながら、当面の需給環境からこの米価・生産者手取り水準は当面続き、むしろこの水準をどう守っていくかが課題。

○令和3年産米中通り地区の手取試算

単位：円/60kg、俵/60kg、円/10a						
区分	品種	生産者手取	単収	10a収入	戦略作物助成	計
主食用米	コシヒカリ	8,800	9	79,200	0	79,200
	天のつぶ	7,800	10	78,000	0	78,000
加工用米等	天のつぶ	5,000	10	50,000	20,000	70,000

(2) 主食用米

- すくなくとも、令和3年産米の手取り水準を維持できるとした場合、「コシヒカリ」と「天のつぶ」の10a収入に大きな差異はないが、「コシヒカリ」を拡大していけば、天のつぶの販売は円滑にすすまず、全体的な価格下落の要因となる可能性。
- このため、「コシヒカリ」の価格を一定水準維持し、「天のつぶ」等の販売を円滑にすすめるには、コシヒカリの作付比率をさらに縮小する必要があるのではないか。

(3) 非主食用米

- 飼料用米に限らず、加工用米・輸出用米等を拡大していく必要

がある中、60kg 当たりコスト削減のため「天のつぶ」を中心とする収量性の高い品種の拡大は必要ではないか。

- ただし、輸出用向けには「コシヒカリ」が求められるケースも多く、制度別・用途別には「コシヒカリ」の多収栽培技術の構築も必要ではないか。

(4) 品種構成

- 以上から、「天のつぶ」の作付けを大幅に拡大することが必要ではないか。ただし「天のつぶ」についても制度別・用途別に栽培技術体系を変える必要があるのではないか。
- 「里山のつぶ」についても、天のつぶと同じ位置づけで平場での作付けをすすめてはどうか。
- このため、需要に応じた制度別・用途別品種生産の観点から、現状の種子生産・供給体制についても見直しを行う必要があるのではないか。

(5) 技術対策

- 気候変動に対応した品質・収量の維持に向けて現行の栽培技術体系の見直しをすすめるとともに、競争力強化・収入確保の観点から、品種別・制度別の多収技術の構築が必要ではないか。

以上